

ないふ 流転迷子

monobe0329

男 膝がふるえている、座席から立てない・・・

テーマ音楽

単調な列車の音。車内のざわめき。

男 座席は詰まっていて、つり革持つ人も多い、それはいつものこと、だけど、違うのは俺の真向かいの座席だ。吊革の男の向こう、列車が揺れるたびに、向かいに坐る女の姿が見える。

女の口元、異様に赤い唇だけがにっと笑みを浮かべている。そして、問題なのは・・・、透けて後ろの窓が見えること、いや、そうじゃない、首、女の喉に大振りのナイフが突き立っているってことなんだ。

男 誰も気づいていない、あの女が見えないんだ。そうだ、次で降りてしまおう、もうすぐ駅だ、とにかくここから逃げ出だすんだ

列車の連続音がゆっくりとなり、停まる。ドアの開音。

ざわめき。

男 は、早く立つんだ。たくさんの人が降りていく、俺も降りていく人たち、スリットのように女の姿が浮かぶ。

女と眼があった・・・、女の唇の両端が異様につり上がる、俺を見て笑ったんだ。女の顔が俺に迫ってくる、笑う女の顔が俺の視界一杯になる、押しつぶされてしまう

動けない逃げ出せない。

消えた・・・

どうしたんだ、いない、空いた席が俺の前にあるだけだ。消えてしまった、・・・そうだ、乗客達と一緒に降りていったんだ

女、耳元、かすれた声でささやくように

女 見えているんだろう、あたしが

男、大きく息を吸い込む。

ドアの閉まる音、列車が動き出す。

女 冷たいねえ、女の子が喉にナイフ突き立ててるんだぜ

男 あ、あっ、ああ、あの

女 可哀想だなあとか、思わないかい

男 だっ、だだた・・・

女 そうだよなあ。他人のことだもんなあ、関係ないよねえ

男 すいませんっ、ごめんなさい

女、小さく笑って。

女 ほおら、やっぱり見えてたんだ

男 えっ・・・

男 俺の目の前にナイフ突きたてた女が浮かび上がる。喉元、ナイフ、指差して・・・
ナイフを抜けと指差す

命じられるままにナイフを掴む。

冷たい、手のひらが張り付きそうだ。体まで凍えてくる。息が苦しい。喉が詰まる。喉のこれは、血の味だ。俺は血を吐こうとしているのか、いや違う、これは・・・、俺は手のひらを通して女の血と一つになっているんだ

男 早く

女、普通の、囁く声で

女 早く

男 力を込めて、抜く

どうして・・・。掴んでいる筈のナイフが掌から溶けだしていく。氷が溶けるように消えてしまった

列車の音。

男 女が何処からか、スカーフを取り出して首にしっかり巻いた。

女、普通の声で、なにげなく。

女 ありがと。不便でさ、やっと普通に喋ることができるよ

男 話が見えない・・・。いや、見えなくていい。知らない、俺は何も知らない、見ていないんだ

女 おいおい、いい大人が引きこもりかい、世話になったからさ、悩み聞いてやるよ、話してみな

男 え、いや、あの、なにも・・・

急に、女、しとやかにしおらしく。

女 そう・・・。そうだよ。あたし、幽霊だもの、恐くてあたり前だよ。ごめんなさい

男 いや、あの、決して、あの、そういうわけじゃなくて、なんというか

女 女にころっとだまされるタイプだね。よく言えば正直。でも免疫がないとなあ。これからの人生、生きていけないぜ

男、少し笑い出す。女も小さく笑う。

男 なんだか、肩の力が抜けて、ありがとう

女 ありがとうって

男 変ですね、素直にありがとうって言ってしまった

女 あたしの人徳ってやつだな

男 そうかもしれない

男 にっと笑う赤い唇。あたりまえのように俺の横に座った。どうしてだろう、なんだか、落ち着いてしまって、恐さもすっかり消えてしまった

女 あたしが怖いんじゃない、あんたの中にある虚像が恐怖を撒き散らしていた、それだけのとき。たいしたことじゃない

男 えっ・・・

女 あんたの顔にそう書いてある

男 女はかすかに視線を落とし、口をつぐんだ。俺はどうしてだろう、何かとても哀しくなって

、自分が情けなくなって、ハンカチを取り出し、女の唇を拭う。どうして、そうしたのかはわからない、ただ、そうすれば、少しだけでも、ほんの少しだけでも。

女 面白い人だな、あたしが見えるわけだ

男 少し顔を上げて、にっと笑う。陰のある、でもやわらかな笑みだ

女 ん、その定期券は

男 あ、ハンカチ出したときだ・・・

男 定期券拾って、降りたら改札で渡そうとポケットに入れてた

女 貸してみな

男 女は興味深そうに俺から定期券を取り上げる

女 なるほどねえ。きまぐれ、それとも縁（えにし）とでも言おうか

男 どういうこと

女 つまりはいいもん、拾ったってことさ、あたしに出会えたんだからさ

男 定期券を人差し指と中指の先で挟み込む。

そして、女は自分の顔の前に定期券を

女 次は誰が受け取るんだろうね

男 ささやくように呟いて、そっと定期券に息を吹きかける。さらさらと・・・

男 さらさらと定期券が光の粉になって飛んでいった。飛んで・・・

女 まあ、こんなとこだ

男 そう言って女が向かいの座席に笑いかけた。向かいの席、小さな子供が身を乗り出して女を見つめている

女 子供はさ、たまにあたしの姿を見る、あたしは、ちょっと嬉しくなる

男 やわらかく笑みを浮かべて、小さく手を振っている。子供も笑って手を振り返す。

女 ナイフがないってのはいいよねえ

男 そういえば、ナイフ、どうして喉に

女 秘密さ

男 え

女、かわいく笑って。

女 女の子には誰にも話せない秘密の一つや二つ、あるものなのよ、ごめんなさい

男 楽しんでますね

女 ナイフを消してもらって、なんだかさ、心の底に澱のようにして溜まっていたはずの恨みや妬み、すっかり消えてしまったんだ

男 それじゃ、これから

女 これから・・・、さてねえ、どうしようもないな、あたしはひとりぼっちだ。牢獄に閉じ込められているんだよ

男 牢獄ってここに・・・

女 普通の人たちはあたしの声も聞こえない、姿も見えない、つまりはあたしの存在はないわけだよ。目の前にいても、大声張り上げていてもさ。牢獄で、一人テレビ見ているようなもんだ。でもさ、あんたやあの子のように、気づいてくれる人たちもいる、ちょっとあたしは優しくなる

男 いつのまにか、向かいに座っていたはずの子供が女の前にたたずんでいた。目に一杯涙をためている。女がそっと手を伸ばし、子供の頭をなでている。

女 子供は苦手なんだけどな、本当は

男 笑みを浮かべるその表情がとてもはかなげで、つらくて仕方がない

列車がゆっくりと止まり、ドアが開く。本来なら、車内アナウンスがあるはずだが、邪魔なので割愛。

女 それじゃあね。ありがとう

男 ゆっくりと立ち上がり、女が列車を出る。俺も

ドアの閉まる音、列車の動き出す音。

女 あんたもここで降りるのか

男 遠ざかる列車の窓、女は笑顔の子供に向け、そっと手を振る

男 俺と一緒にいませんか。これから

女 そういうのもありかもしれないな。でもね、あたし、あんたと会って少しわかったことがある。

男 わかったこと・・・

女 ほんの少し、自分が暖かくなった、そんな気がしてね

男 暖かく

女 体の冷たさ、希薄さはかわらない。でも、なんだかさ、ちょっと暖かいんだよ

女 ね、あたしに手を伸ばしてみな

男 言われるままに女に手を差し出す。気弱げに笑って女も手を差し出す。

そっと指を絡める。微かに感じる指先、冷たい、でも、なんだか、静かでおだやかだ

女 次に会うときは、次に会うときにはさ

男 ええ、次に会うときは

女 いつか、どこかでね

男 女がやわらかに笑みを浮かべる。俺もなんだか、あの子供のように泣きそうになりながら、いっぱい笑顔の浮かべる。

ゆっくりと女の姿は薄れ、後ろの風景と重なり、そして消えていった。

いつか・・・

最後の男の台詞、途中から音楽。

終わり

列車の中にて。

女一 帰りの電車の中、あたし、通路側。彼女、彼女だ、彼女は向かいの窓側。こう、なんていうの、二人用の座席が向かい合った列車の座席って、ああ、なんていったっけ、ああ、そんなことはどうでもいいんだ。

彼女、足を投げ出して気持ちよさそうに眠っている。無防備なほど気持ちよさそうに寝ている。声を、声をかけてみようか。

で、でも・・・、ほんとは何事もなかったように、すっと立って席を替えればいいだけのことなんだ、あたしの中でもう一人のあたしが叫んでいる、逃げろ、逃げろって。

・・・透けているんだ、彼女の躰。透けて、座席が見えるんだ。

あたし、おかしくなったの。幻覚、幻影、勉強のしすぎ、ってわけない、わけない。えっ、

あ・・・、そうだ、そうか、幽霊だ。彼女、幽霊なんだ。

え、あたし、どうして・・・。

本当にどうしてだろう、彼女の頬に手を触れていた。

冷たいけど、なんだか、気持ちいい。

そっと、彼女が目を開ける。口がにいいっと微笑んだ。

消えた・・・。ああ、幽霊だ、昼間っから幽霊だ、春なのに幽霊だ。

逃げろ、逃げろ、逃げるんだ。

女二 なんだよお、人が気持ちよく寝ているのにさ

女一 あたしの耳元で声がした。うわっ、目の前に顔があ

女二 おおい、叫ぶなよ。恥ずかしいぜ。女の子が白昼の列車の中、一人、座席で大声あげたらさ、なにい、この娘（こ）、変なんじゃない、ってさ、白い目で見られてしまうぜ。ふふっ。

女1 彼女、あたしに顔を寄せて、あ・・・、口づけ、やわらかくて少し甘くて、あたし、あたし・・・

女2 大丈夫さ、数には入らないよ

女1 なんだか、足の力が抜けてしまって、あたし、座席にぺたんって座り込んでしまっている。何をどうすればいいんだ

女2 何処で降りるんだ

女1 叶意町（かないまち）、二つ先の駅です

女2 時間あるね、少し、お喋りしよう

女1 にいいって笑って、彼女、幽霊さんがあぐらをかき、長いスカートだから、あ、足。足はあるんだなあ・・・

女2 あんた、名前は

女1 私、幸子です。

女2 どんな字書くの

女1 幸せな子

女2 親の願いが詰まった名前だ、いいね、そういう名前

女1 あの、貴方は

女2 覚えてないんだ

女1 それは死んだ、いえ、あの、お亡くなりになった時のショックで

女2 いや、死んだ時は名前を覚えていた。覚えていたんだという記憶はある。結局さ、あたし、いま、一人だからさ、名前を呼んでくれる人がいないんだよ。だから、どうしても思い出せない、思い出せず、何処に帰れば良いのかもわからずに漂っている。

女1 思い出せれば、成仏できるのでしょ

女2 さてね、そもそもさ、成仏ってどういうことかわからないよ、やったことないからさ。

ただ、自分が居るべき場所があって、なんっていうかな、いま迷子になってんだって焦りばかりがある

女1 幽霊さん、ちょっと笑った、でも、それはとっても哀しい笑顔だ。

女1 名前を思い出しましょう、そうすれば、必ず道が見つかります

女2 どうしたの、いきなり

女1 あ、え、いえ、あたし・・・

女2 でも、面白そうだ、駅に着くまで女の子の名前を出し合ってみよう、なんか、引っ掛かるかもしれない

女1 そうしましょう、きっと見つかりますっ

女1 あたし、どうしてだろう、ぎゅっと幽霊さんの手を握っていた。ひんやりとしてとっても冷たい、でも、不思議、優しいんだ

間、少しずつ大きく

女1 恵子、洋子、良子

女2 あかね、明美、幸江

女1 恵美子、裕子、礼子

女2 あ・・・

女1 気になるのありましたか

女2 そうだ、「子」が付いていた気がする

叶意町、到着のアナウンス、ドアが開く音。

女2 ありがと、なんだかさ、幸ちゃんとはまた会えるような気がする。いつか会える時まで、しっかり自分の名前を思い出しておくよ

女1 嫌です、思い出すまでお付き合いします

女2 え・・・

ドアの閉まる音、列車が遠ざかって行く。

女2 列車から降りることはできる、ただ、駅からは出られないんだ。多分、降りるはずの駅が何処かにあるんだろうって思っているんだけどね

女1 ごめんなさい

女2 はは、幸ちゃん、必死な顔していた

女1 なんだか、どうしても、このまま、別れるのが寂しくて

女2 出会いに偶然はない、すべては必然だと言い切ったっ奴がいた。多分、この出会いも必然なんだろう、左の手首出してみな

女1 え・・・

女1 おそろおそろ差し出した

女2 手首のためらい傷、随分とあるね。痛かったろう

女1 はい

女2 でも、痛いと感じる自分がいることで、ほんの少しだけ、生きているって実感を得ることができる

女1 どうしてだろう、泣きそうになりながら、あたし、頷いている

女1 幽霊さん、髪を一本抜いた、そして、その髪をあたしの左手首に巻いてくれた。ひんやりして気持ちが良い

女2 護り髪だ、神様の神転じて髪の毛の髪。幸ちゃんの手首に溶け込んで、髪が災いから護ってくれるだろう。

女1 ありがとう・・・、ございます

女2 しかし、護り髪、どうして、こんなこと知ってんだろう。生きている時、あたしは呪い師か詐欺師だったのかも知れないな。

女1 幽霊さんはとてもいい人です

女2 わかんないぜ

女2、くすぐったそうに笑う。

女2 今日はありがとう、あたしも久しぶりに笑った。さて、幸ちゃん、もう帰りな、そろそろ暗くなる

女1 でも、名前を

女2 今はこれ以上思い出すのは無理だ。

女1 どうして

女2 なんとなくけどわかってきた気がする。

女2 あたしがこうして彷徨っているのは、何かの役目か、自分の罪を滅するためのやり方なんだ。

女1 役目・・・、やり方

女2 こうして彷徨って、出会うべき必然を待つってことさ。出会い、相手になんらかの益を提供することで、あたしはあたしを、ほんの少しずつ取り戻して行く。気の長い話だ

女1 あたしとの出会いはもう済んだということなのではないでしょうか

女2 いや、始まったということ。この出会いであたしは少し変わった。幸ちゃんも少し変わった。成長という変化を始めた。手首を切らずに生きて行ける、そんな行き方を幸ちゃんは見つけないといけないし、見つけようとするだろう。いつか、重なった道筋は、また、離れて行く、でも、それは始まりだ。出会うことで縁ができた、この縁はいずれ、あたしを幸ちゃんに合わせるだろう。その時を楽しみにしているよ

女1 はいっ

女2 泣いた子供がもう笑った

女1 子供じゃないですよ

女2は小さく笑う。

女1 幽霊さん、手を振ってくれた。あたしも、そっと手を振る。少しずつ、幽霊さんの姿が薄れていく。消えた・・・。

女1 寂しい、とても寂しい。でも、あたしは今までで一番元気だ。前へ進んでいくことが出来る。